阳和六十 年度寮

き希が

望満つ

野こ 心。 呼力もて進まん も赤き夕手稲

べ鼓音闇 に消えるか ストー な

くかこの石狩平野

夏短かくて ・ムに

鳴呼轟くかこの 朝の日露に寮歌の かの 声え

胸き

迪寮に若き男子等が

理ロマ 想ン 鳴呼その自治寮創造くか理想の存在求めつつ の存り 存在求め

淡き憧憬 拙な お言葉操 に焦れ来る りて

鳴呼この青春も早や行かんぁぁ の内を打ち明け

詩を忘却れぬ若りれ実粉雪に荒ぶれ ね若人が れど

な 北雲

斗煌を く晩秋夜

0

波な

鳴呼 涙 して更く 明日の旅路を思い 明日の旅路を思い ます たびじ おき かあるなだ ふ の旅路を思いつつ して更くる夜

鳴呼声もなく迪を行く 神きま こだらかせった 中間 舞う木立烈風強く 白雪舞う木立烈風強く ウルール から 真理素めんと かっか しんりもと たる原始林に我一人

鳴呼この! 郭っこう 公う の啼き 初夏も過ぐるかななっ 戸の清らか さ

鳴ぁ雁が楡に

Sり暮く

ħ

る

が見れない

我が憂ひすずろかな

ょ

夕暮風の涼

しさに

の悲し

しみ知れるか、

な

沈黙ま

の彼方微かなる 酔狂も静寂まりて

ഗ

九

鳴呼このはなんぷうしき 若き 明日 た も した も巡れる四度に っに頬を打 の祝極、 ح

この別離永却からず

原 澤 辰 眀 君 作 歌

Ш

森聡

君

作

曲